OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本人の自己形成と世間
Author(s)	上田, 恵津子
Citation	大阪大学教育学年報. 1996, 1, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 創刊号（1996年）
Annals of Educational Studies Vol.1

日本人の自己形成と世間

上田 恵津子

【要旨】

本論文は、日本人の自己の形成・発達に世間がどのように関わっているかを、幼児期と青年期に焦点をあてて考察したものである。日本では、ひとに笑われないように世間なみに行動することが基本的規範になっている。自己が芽ばえる幼児期には、「いい子」であるようなしつけが行われる。「いい子」とは、素直、従順、きちんとしている、辛抱強いなどを特徴とするもので、大人にとって扱いやすい、“世間の規準からみたいい子”である。日本では内と外が分化しており、外では世間の眼が光っているので、「いい子」でいないと、本人はもちろん家族も世間から笑われ、非難される。そこで、“世間の規準からみたいい子”というアイデンティティを作るべく、自己が形成されると考えられる。青年期と世間との関わりは、社会的比較と対人恐怖という2つの観点から考察される。青年期は自己を再構成する時期であるので、世間の規準から自分が逸脱していないかどうか、世間なみであるかどうかが気になり、それを判断するために、年齢の類似した他者との社会的比較を多用すること、また、対人恐怖症あるいは対人恐怖的心性は、世間の眼を過剰に意識しすぎるためにおこる「世間体の病理」であること、が指摘された。

Ⅰ．はじめに

我々は日常生活の中で、外界や他者から区別された「私」「自分自身」を多かれ少なかれ意識している。

このような「自己」は、他者との相互作用を通じて形成されていく。

また、「自己」は文化の中で形成されていくものでもある。日本人の自己は、土居（1971）の「甘え」、木村（1972）の「人と人との間」、濱口（1977）の「間人主義」、南（1983）の「自我不確実感」、Markus＆Kitayama（1991）の「相互協調的自己観（interdependent construal of self）」といった様々な概念で説明されている。これらに共通して認められる日本人の自己の特徴は、自分と他者との区分があいまいで、独立した主体としての「個」の意識が弱く、自己認識の内容や構造が周囲の他者によって強く規定されるということである（高田，1992）。

このように、日本人の自己は他者志向性が特徴であるので、その形成・発達には他者が特に重要な役割を果たしているといえる。

自己が形成される過程に影響を与える「他者」として、従来の研究では、親や友人などの身近な他者との関係が取り上げられてきた。しかし、日本人の自己の形成においては、そのような他者だけでなく、「世間」という他者の影響も考えるべきである。

阿部（1995，p.30）は、次のように述べている。「日本の個人は、世間向きの顔や発言と自分の内面の想いを区別してふるまい、そのような関係の中で個人の外面と内面の双方が形成されているのである。いわば個人は、世間との関係の中で生まれているのである。世間は人間関係の世界である限りでかなり曖昧なものであり、その曖昧なものとの関係の中で自己を形成せざるをえない日本の個人は欧米人からみると、曖昧な存在としてみえるのである。ここに絶対的な神との

関係の中で自己を形成することからはじまったヨーロッパの個人との違いがある」。また、早坂(1979, p.154)は、日本人は他者志向というより「世間志向」であると指摘している。すなわち、日本人にとっての「他者」として、「世間」は重要な位置を占めているといえるのである。

そこで、本稿では、日本人の自己の形成・発達に世間がどのように関わっているかを考察する。特に、自己が芽ばえる幼児期と、自己が質的に変化し再構成される青年期に焦点をあてて、自己形成における世間の役割・意味を探ることを試みる。

Ⅱ. 教育と世間

1. 世間とは

「世間」は、井上(1977)により以下のように定義されている。

「世間」とは、個人(つまり行為主体)の側からいえば、日本人に特有な一種の準拠集団である。準拠集団としての「世間」を区別する規準は、ウチとソトの観念である。ウチの集団とソトの集団との関係は、同心円的に重層化した構造をなしている。ウチに対してソトであった集団が、さらにソトの集団に対してはウチの集団となる。このような構造の論理的帰結として、これ以下はウチとしか言いえないような小さな集団の単位と、これ以上はソトとしか言いえないような大きな集団の単位が残ることになる。前者の観念の総称(一番内側の世界)が「ミウチ」あるいは「ナカマウチ」であり、後者の観念の総称(一番外側の、いわば無縁の存在ともいうべき世界)が「タニン」あるいは「ヨソのヒト」である。そして、その中間帯の世界こそが「セケン」であり、これはさらに「せまいセケン」と「ひろいセケン」の二層から成る。つまり、個人にとってミウチやナカマウチほど近くなく、タニンやヨソのヒトほど遠くなく、その中間帯にあって、私たちの行動のよりどころとなる準拠集団が「世間」である。我々は、ミウチの間では「ミウチの恥にふた」をすることができ、タニンの前では「旅の恥はかき捨て」でもよいのであって、ともに体面をとりつくろう必要はない。我々にとって体面が問題となるのは、その中間帯の世界においてなのである。

日本人は日常生活において、「世間」に準拠して、自分の行動を律し、判断していることが多い。つまり、日本人は、おおむね「世間」に準拠して恥ずかしくない行動をすることを社会的規範の基本においてきた。人の行動が「世間」という社会的規範の適応規準から逸脱した時、「はじ」という形式の社会的制裁を受けるのである。「世間」に準拠して恥ずかしくない行動をするということは、とりもなおさず「世間」から笑われないような行動をすることであった。従って、「世間のもの笑いにならない」ように、我々はいつも「世間の眼」を気にして、体面・体裁、つまり「世間体」をつくろっていなければならない。唯一絶対神をもたない日本人の多くは、「世間の眼」から見られた時の自分を恥じるという、きわめて状況的な倫理を個人の内面につちかってきた。日本では、普遍的な価値規準をもたなかったので、「世間の眼」にとらわれるという状況の過程の中で、ひとに笑われまいとする防禦的な側面が重視されてきた。このように、ソトなる「世間」の価値規準にコミットすることによってウチなる自分を見つめるというのが、日本人に特有な「準拠集団」の構造の本質である、という。

2．教育における世間

日本人は、「そんなことをしては、ひとに笑われますよ！」といって子どもを育てることが多い。井上（1977）はこれを「笑いの教育」と題して次のように論じている。

「ひとに笑われる」という場合の「ひと」は、特定の人をさすよりも、むしろ「世間」ないしは「世間の人」という言葉に置きかえて、一般化することができる。「体面・体裁」を内面化する〈しつけ〉を通して、私たちは、「なにをはじるべきか」を学習してきたのである。わが国のしつけは、この意味で、「〈はじ〉の社会化（socialization）」であったといってよい。私たちが人前ではずかしい思いをしないためには、なににつけても目立たないことが肝要である。「世間」は極端を嫌うものであるので、そんな「世間」を賢明に渡るこつは、すべてにわたって、「世間なみ」に生きることである。要するに、ひとに笑われないためには、私たちは、なににつけても中庸をいく、「世間なみ」という適応規準にもとづいて判断し、行動するにしくはないのである。そして、自分だけが目立たないようにしようとする振舞いは、〈気がね〉の心情をともなわずして、決して成り立ちえないものである。

かつては、「はじ」の社会化の段階におおよそみあったような教育が、地域社会のなかで、かなりシステム化されていた。「世間教育」がそれである。「世間」の批評に規準をおいて、自分たちの行動を律しようとする社会的規範は、もとはといえば、人を〈一人前〉にするための教育と、きわめて密接にむすびあっていた。それぞれの地域社会には、人を〈一人前〉のおとなに仕立てあげるための教育のシステムがおおむね準備されており、人は、そのシステムのなかで、いろいろな生活の技術や行儀作法をも身につけていったのである。かつて子どもたちは、いずれ成人すれば、つめたい「世間」の波風のなかに出てゆかねばならなかった。そんな「世間」に出ても、笑い者となって不要の「はじ」をかかぬように、かれらには平素から、意図的な教育がほどこされていたものである。「笑いの教育」は、「家庭教育」であったばかりではなく、かつてはむしろ、地域社会における重要な「社会教育」であった。ところが、今日では、社会の近代化にともなって、地域社会における社会教育としての「笑いの教育」は、すっかり影をひそめてしまった。「笑いの教育」は、かつては〈教化〉のしつけであるとともに、知らず知らずのうちに受ける〈感化〉のしつけでもあった。今日では、〈感化〉の側面の意味あいがすっかり脱落してしまって、情報（ことば）だけによる〈教化〉のしつけが横行しているとの感がふかい。「笑いの教育」は、人が「世間」に出てはじめて、そのありがたさを知る、という性質のものであった。「世間体」をおもんぱかって生きてきた人々の〈生活の知恵〉から生まれた「笑いの教育」を、主体性の欠如という観点からのみとらえてはならないし、ただ封建的なものとして一掃してしまってはならない、と井上はいう。

阿部（1995）は、親と子の葛藤に世間の問題が深く関わっている、と指摘する。親は長年の間世間の荒波をくぐって生きてきたので、世間というものの恐さを十分に知っている。しかし子供はまだ世間を知らない。子供には自分の夢があり、それが実現できると思っている。親は自分が苦労した世間との葛藤を子供にはさせたくないと思っている。親と子の葛藤の多くはこの種の問題である。しかも親が子供に世間を対象化して普遍的な形で説明することが困難であるという問題もある、という。

このように、世間との関係を意識した教育を通して、我々は、世間から笑われるような行為は

悪い行為であるということと、世間のもの笑いになるのは避けなければいけないということとを学習する。つまり、「世間に通用しない」ことはしないように、行動の規則を身につけることになるのである。

Ⅲ. 幼児期における自己形成と世間

ひとに笑われないように、「世間なみ」に行動することが重視される日本において、幼児期のしつけで強調されるのは、「いい子」であらねばいけない、ということであろう。親が子どもに「いい子にしていなさい」とか「いい子だから・・・しなさい」と言いきかせたり、子どもがいうことを聞くと「いい子だ」とほめたりする光景はよく見られるものである。ここで重要な問題は、「いい子」とはどういうものであるのか、何をもって「いい子」というのか、ということと、誰にとって「いい」のか、ということである。

東（1994）は、しつけや教育の方法を日米間で比較して、以下のように考察している。

日本では、「うち」と「そと」で行動を使い分ける傾向が強い。これは、教師や「よそ」の大人との関係を中心にした権威的秩序の世界と、母子関係を軸にした共生的相互依存の世界とが実際に異なった行動原則を要求しているので、そのふたつの世界を行き来することで自ずから形成される社会化の結果である。ふたつの世界では子どものとるべき役割が違うので、行動が変わるのである。従って、日本のしつけでは、「家ではそれでよいけれど外ではこうしなければいけない」「誰それに対してはこういう言葉遣いをしなければならない」といった、場面によってまた社会的な関係によって行動の仕方を使い分ける訓練が強調される。日本の子どもには、置かれた場面に従って、ここでは自分にどういう行動が期待されているかを察知し、その役割をよく演じようとする態度が、4～5歳までに形成される。子どもを幼稚園や保育園に送り出す朝、母親はたいてい「いい子にするんですよ」という。すでにそれまでの社会化で「うち」と「そと」の分化を獲得している子は、「いい子にしなければいけない世界に行くのだな」と納得する。ふたつの世界の分化を踏まえて「うちではこうだけれども園ではこうするのですよ」という場合、認識は明確になりやすく、行動に対する制御作用は強くなる。多くの子どもたちは、園を「そと」として、勝手にふるまえる「うち」と分化して認識し、さらにそこでは「いい子」が自分の役割であると捉え、それで「いい子」として行動するような内的制御をはたらかせる。そしてこの役割をよく果たすためには、よい俳優が役になりきるように、自分を「いい子」だと思い込めることが必要である。このように、日本では、「いい子アイデンティティ」とでもいうべきものが早期形成される。これは、子どもに「自分はいい子だ」と思い込ませ、「いい子だからこうしなければ」という自己規制力がはたらくのを期待するもので、「自分は悪い」と自覚させ、「だからこう改めなければ」と思わせようとする欧米のしつけとは対照的である。自分をいい子だと受け止めている幼児、つまりいい子アイデンティティを持つ幼児は、新しい状況のもとにおかれたとき、この場面でいい子はどのように行動すべきかを考え、その行動様式を選びとる。その結果が他律的規範に合致するにしても、「いい子」という役割もそれに即した行動も自分で選びとっているのであって、強制される他律的行動とは区別できる。子どもを従わせるための外圧をできるだけ少なくし、「いい子アイデンティティ」を強化するという方略が、行動規範の内面化を最大にす

るのである。「いい子」の特性についての調査結果をまとめると、日本の母親が、そしておそらくは教師や社会が期待する「いい子」像は、素直、従順、きちんとしている、辛抱強いなどを特徴とするもので、アメリカと比べると独立性や自己主張の鮮明さにはあまり重きが置かれていない。あえていうならば、大人にとって扱いやすい子が望まれている。日本型を共生型いい子像、アメリカ型を独立型いい子像といってもよい。このようないい子像が子どもに取り入れられて「いい子アイデンティティ」の核となる。日本の母親は、さらには教師も含めて日本人は、しつけを、それぞれに独立した人間間の権威関係を通じての伝達としてよりも、同化的共生関係の中での行動パターンの浸透として位置づける傾向がある。共生の中で親の願いや価値観がとりたてて教えるのでなしに子どもに滲み込み、それが子どもの「いい子」像の核を形成する。そして子どもは「いい子」としての自分のアイデンティティを守るために、そのいい子像に合わせて自分をコントロールする。「うち」と「そと」を分化して認識させ、自分はいい子だという意識のもとでそれぞれの場にふさわしい役割行動を見つけるように方向づけるしつけが、自発的役割人間が育つための生態学的適所をなしている、と東はいうのである。

このように内と外が分化している日本では、世間に対して恥ずかしくない「いい子」であるようにしつけることがとりわけ大切なのであろう。第1に、「いい子」でいなければ、子ども自身が世間から笑われ、恥ずかしい思いをしなければならない。時には、非難され、排除されることもありうる。何らかの形で制裁を受けることになる。第2に、「いい子」でない場合、本人のみならず家族ならびに縁者一同も連帯責任を負って、同様に世間から笑われ、制裁を受けなければならない。井上（1977）も指摘するように、日本では、〈責任共同体〉としての家族という観念が一般化しているので、反逆者や非行、犯罪者を出した家族に対して、〈世間の眼〉はたいそうつめたいのが普通である。家族は、そんな「世間」に気がねをしなければならないから、「世間」の手前、表立ってかれをかばうことはできず、「世間」をおもんばかって、やむなくかれをイエから追い出すことも多い。あるいは親が自殺に追い込まれたり、きょうだいの縁談が破談になる、などといったことも起こる。家族までもが「世間」からうしろ指をさされ、「世間」に顔むけできなくなり、「世間」をはばかって生きなければならなくなるのである。

家の中では世間の眼がないのでどのようにふるまおうと許されるけれども、一歩外に出れば世間の眼が光っており、「いい子」でいないと世間から笑われ、非難される。そうしたしつけの中で、“世間の規準からみたいい子”を演じる方向で、“世間の規準からみたいい子”というアイデンティティを作るべく、自己が形成されていく、と考えることができよう。

Ⅳ. 青年期における自己形成と世間

青年期は、一般に自己を再構成する時期であるとされる。すなわち、青年期に「自己の確立」をなしとげることが、成人になるための発達的課題であるといえる。

梶田（1988）によれば、青年期は、自分自身が一つの課題となる時期、あるいは自分自身についての探求と再検討によって自己の発見に導かれる時期である。第二次性徴が現れて身体の成熟が進む中で、自分の身体的特徴や容貌が気になり出し、周囲の人が自分をどう見ているかに強い関心を持ち、自分の性格や能力がこのままでよいかどうかとくよくよし、将来の自分について悩

む、というように、自己関心の強まり、他者のまなざしへの過敏さ、自己の将来への関心、自己意識や自己感情の動揺と不安定性、などがこの時期に顕著になってくる。要するに、青年期は、身体的にも、心理的にも、また社会的にも、子どもから大人へ移行していく過渡期である。

また、高田・松本（1995）は、青年は成人より日本的自己の特質を強く現していることを見出した。青年が自己を再構成していく際に、個としての存在に気づくことよりも、現行の日本の社会システムに適合した自己のあり方を積極的に取り込もうとしている可能性が示唆されている。

心身ともに子どもから大人へ移行していく過程においては、自分の身体や考え方、価値観、行動のしかたなどが、世間の規準からみて逸脱していないかどうか、人並み・世間なみであるかどうかが気になる。世間が自分をどう見るかという世間の眼や、自分がどうあるべきかという世間の規準に対して、最も敏感なのは青年期であろう。

このような青年期における自己再構成に世間あるいは世間の眼がどのように関わっているかについて、自己概念の形成機制としての社会的比較と、他者の眼に対する過敏さから青年期に発症しやすい対人恐怖という2つの観点から考察することにする。

1．社会的比較

社会的比較とは、自己と他者とを比較することである。狩野（1985）によれば、社会的比較が行われるためには、自分自身の行動の適切さを他者と比較することにより判断したいという欲求の存在が前提となる。従って、一般に集団志向的で周囲の人々との調和や一致を重んじるといわれる日本人においては、個人主義傾向が強いといわれる欧米人に比べて、社会的比較が生じる頻度が高く、また比較の結果が大きな意味をもつ、という。

青年期の自己概念形成における社会的比較の役割を検討した高田（1993）は、日本人大学生は、日本人成人およびアメリカ人大学生に比べて、自分自身を評価する際に、年齢の類似した他者（同輩）との社会的比較を多用すること、そしてこの傾向は、自己概念の社会的側面（社交、経済力、社会的背景）と、外面的・客観的側面（容貌、運動能力）において顕著であることを見出した。これは、他者、特に同輩への関心の強さ、すなわち他者の視点や状態を基準に自分自身の状態を認識し評価しようとする傾向の強さを示すものであり、それだけ自己概念が他者の影響を受けやすく不安定であることを意味している（高田・丹野・渡辺，1987）。すなわち、常に他者との関係の中で自己を捉えようとする日本文化に特徴的な自己のあり方が、青年期の自己再構成に際して端的に現れていると考えられている。そして日本社会における類似他者との社会的比較への圧力は、他者との相互交渉過程において適切とされる行動の遂行や、他者との良好な関係の維持を目的とする動機を反映する可能性を、高田（1993）は示唆している。

井上（1977）の枠組みでいう「ひろい世間」の規準からみて自分が逸脱していないかどうか、人並みであるかどうかを判断するために、「せまい世間」に属する年齢の類似した他者を参照し比較するという方法が使われるということであろう。そして、身体的側面と社会的側面は、もう子どもではなく一人前の自立した大人になっていくことが周囲から特に強く要求される側面であり、それゆえに他者のまなざしが特に意識されやすい側面であって、また「世間の規準」も明瞭で客観的に把握しやすい側面であるので、社会的比較の多用が顕著である、と考えることもできる。

日本人青年が年齢の類似した他者との比較を多用するのは、世間が自分をどう見るか、あるいは世間に対して自分はどのようにふるまわなければならないか、というように、世間を意識することの結果であり、これが青年期の自己および自己概念の形成に大きな意味をもつということができよう。

2．対人恐怖

対人恐怖とは、「他人と同席する場面で不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのために他人から軽蔑されるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型」（精神医学辞典）である。他者の前での自己のあり方、他者に知覚されている自分について悩む、すなわち対人関係のあり方が問題であるというのが基本的な特徴である（井上，1982）。対人恐怖は、日本に特徴的な神経症であり、大部分は青年期に発症するということが指摘されている。

発症年齢が青年期に集中していることから、青年期の自己形成過程における何らかの“つまずき”が対人恐怖という形で現れる、と考えることができる（高田ら，1987）。

ただし、小川・林・永井・白石（1979）は、対人恐怖症者に認められる対人関係上の「悩み」を、対人恐怖症者、日本人大学生、アメリカ人大学生で比較し、日本人大学生は、対人恐怖症者とアメリカ人大学生とのちょうど中間に属するという結果を得ている。これは、日本人の場合、健康な一般大学生であっても、対人恐怖症的対人「意識」をある程度はもっていることを示している。

日本人青年が一般に対人恐怖的な対人意識をもち、それだけ周囲の他者に敏感で自己のあり方が他者規定的であるという事実は、日本的自己のあり方が青年期におけるアイデンティティ達成の障害になりやすいことを示唆している（高田ら，1987）。

対人恐怖症あるいは対人恐怖的心性と、世間との関わりについては、以下のような見解が認められる。

中山（1988）は、世間が自分をどう見るかに根ざす「過剰配慮」は青年期が最も顕著であり、それが対人恐怖的心性の一因子となると述べている。その底には「人から良く思われたい」「良い子で振舞っていたい」とする心性があるという。

内田（1995）は、対人恐怖的心性の高い大学生は、世間を居心地悪いもの、そしてきたないものと感じており、世間に対してネガティヴな感情を抱いていることを見出している。

大橋（1983）によれば、青年期は、子どもから大人への、またウチからソトへと生活空間を拡大する移行期、換言すれば、渡る「世間」＝ウチとソトとの中間領域を新たに構成しなければならない時期である。つまり、「ソトに馴染む」過程により、ソトがウチ化されて「世間」という空間を主体的に構成するのである。この移行期に「世間」の構成に失敗すると、彼の世界はウチとソトに再分極化する。すなわち世間を渡れない。これが対人恐怖につながる、という。

対人恐怖が生じやすい状況として、笠原（1977）は「半知り」の人たち、内沼（1990）は「中間状況」、木村（1982）は「Bゾーン」をあげている。いずれも、特に親しくもなく、見知らぬ人でもない、その中間的な関係にある人たちとの間に構成される状況である。これは、井上（1977）のいう「セケン」にあてはまる。すなわち、日本人の場合、この「セケン」という中間

的な人間関係において対人恐怖という病理が生じるのである。

また、井上（1982）は、まわりの人たち、特に馴れない相手に対する“はじ”の意識が一歩転じて、まわりの人たちに対する“おびえ”の意識に変わったとき、それは「対人恐怖」となってあらわれるのであり、「はじの意識」と「対人恐怖」とは、たいそう近い距離にあるものといわざるをえない、と述べている。

このようなことから、井上（1982）は、対人恐怖を「世間体の病理」である、とするのである。

自分なりの世間を構成し、世間とのコミュニケーションのとり方を学習し、世間との関係をうまく築いていくことが青年期の課題の一つであり、それに取り組む過程において感じる一種の居心地悪さやとまどい、葛藤が対人恐怖症あるいは対人恐怖的心性につながっていくのではないかと考えられる。

V. おわりに

本稿では、日本人の自己の形成・発達と世間との関わりを考察してきた。しかし、本稿で論じきれなかった問題は数多く残されている。

第1に、世間の眼を意識する「世間志向性」は、自己規制・自己抑制という面ばかりが注目されがちであるが、必ずしもそのような消極的・防禦的な面ばかりではない。井上（1977）が指摘するように、自己顕示的行動は、世間の眼にとらわれず「世間」の常識・「世間なみ」の規準からはずれているように見えるが、実は、「世間」の常識から故意にはずれようと意識している点で、やはり「世間」の規準にとらわれているのであって、いわば〈世間体の裏がえし〉とでもいえるものである。また、中山（1988）は、竹の子族のような「目立ちたがり型」や非行グループのような「ツッパリ型」の行為もまた、他者の眼を強く意識した者の補償行為であって、他者の眼に敏感でそれに過剰に配慮している点では、対人恐怖との共通性をもっている、と述べている。このように、「世間志向性」には表・裏とでもいえる両面が存在することを忘れてはならない。

第2に、自己のどの側面が世間とどのような形で結びついているのか、そしてそれが行動にどのように影響を及ぼすのかというプロセスを明らかにすることが今後の課題である。

第3に、すべてを「日本的」という言葉でかたづけてしまうのは早急である。日本人がすべて日本的自己をもっているわけではないし、日本的自己が日本にのみ特有のものというわけでもない。また、日本的自己の形成過程が世間との関係でのみ説明できるわけでもない。日本人がすべて「日本的」とはいえないのである。

日本文化の枠組みから自己を捉えようとする時には、文化の枠を超えた普遍的な原理と文化の影響による特殊性とをしっかり見きわめることが必要であろう。日本文化と欧米文化の優劣を論じるのではなく、両者の違いを理解した上で、日本文化がどう反映されているかという視点から自己を捉えることが必要である。発達との関連でいえば、東（1994）が指適する通り、欧米のように自己が自己完結的になっていくのもひとつの発達の方向であり、日本のように他との絆が強くなりそれが自分の中に取り込まれていくのもやはりひとつの発達の方向であって、価値的にどちらを上とはいえない。さらに、今後は自己の発達目標の方向が変わることもありうる。時代と

状況の変化を含めて文化の影響を考えていくことが望まれよう。

引用文献

阿部謹也　1995　「世間」とは何か　講談社
東　洋　1994　日本人のしつけと教育 ── 発達の日米比較にもとづいて ──　東京大学出版会
土居健郎　1971　「甘え」の構造　弘文堂
濱口惠俊　1977　「日本らしさ」の再発見　日本経済新聞社
早坂泰次郎　1979　人間関係の心理学　講談社
井上忠司　1977　「世間体」の構造 ── 社会心理史への試み ──　日本放送出版協会
井上忠司　1982　まなざしの人間関係 ── 視線の作法 ──　講談社
梶田叡一　1988　自己意識の心理学［第2版］　東京大学出版会
狩野素朗　1985　個と集団の社会心理学　ナカニシヤ出版
笠原嘉　1977　青年期 ── 精神病理学から ──　中央公論社
木村敏　1972　人と人との間 ── 精神病理学的日本論 ──　弘文堂
木村駿　1982　日本人の対人恐怖　勁草書房
Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review,* **98**, 224－253.
南　博　1983　日本的自我　岩波書店
中山治　1988　「ぼかし」の心理 ── 人見知り親和型文化と日本人 ──　創元社
小川捷之・林洋一・永井撤・白石秀人　1979　対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究（1）── 比較文化的視点から ──　横浜国立大学教育紀要，**19**，205－220.
大橋秀夫　1983　鬼と世間と人見知り　青年心理，**41**，52－59.
高田利武　1992　他者と比べる自分　サイエンス社
高田利武　1993　青年の自己概念形成と社会的比較 ── 日本人大学生にみられる特徴 ──　教育心理学研究，**41**，339－348.
高田利武・松本芳之　1995　日本的自己の構造 ── 下位様態と世代差 ──　心理学研究，**66**，213－218.
高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲　1987　自己形成の心理学 ── 青年期のアイデンティティとその障害 ──　川島書店
内田裕之　1995　大学生の世間意識と対人恐怖的心性との関連　心理臨床学研究，**13**，75－84.
内沼幸雄　1990　対人恐怖　講談社

Seken and Development of Self in Japanese Culture

Etsuko UEDA

This paper focuses on the relation between the development of self in Japanese culture and *seken,* especially in infancy and in adolescence.

It is customary for the Japanese to behave in such a way as not to be ridiculed by *seken* according to its norms.

In Japanese culture, the purpose of infant discipline is to nurture "a good boy or girl" in public situations. The characteristics of "a good boy or girl" are "meek","obedient","scrupulous", and "patient". These represent an image of a good child judged by the standard of *seken.* When an infant doesn't behave well in public situations, not only he/ she but also his/ her family are ridiculed and condemned by *seken.* Therefore self in infancy will develop into "a good child judged by the standard of *seken*".

The relation between the development of self in adolescence and *seken* is discussed in terms of social comparison and anthropophobia. First, it is suggested that an adolescent tends to compare himself/ herself with similar others in order to check whether his/ her appearance or behavior fits the standard of *seken.* Second, it is considered that oversensitiveness to *seken* causes anthropophobia or anthropophobic tendency. Therefore consciousness to *seken* is regarded as an important element in the process of re-formation of self in adolescence.